

「遺存地割による平城京の復原調査」の成果を踏まえて、さらに朱雀大路発掘調査の予備調査として、遺存地割・地名による平城京の復原調査が補足充実された。

このときの発掘調査では、はじめて朱雀大路の東・西側溝を同時に確認し、道路幅員が明らかになり、遺存地割の水田畦畔は築垣の位置をほぼ踏襲していることが推定された。さらに、大路両側溝の内側には朱雀大路の前身の下ツ道の両側溝も確認されている。

昭和56年に、奈良国立文化財研究所は平城宮南面大垣の調査（平城宮跡第130次調査）に付随して、朱雀門東南方の朱雀大路東側溝と二条大路北側溝の交点を調査し、さらに翌57年には、朱雀門西側の対称位置において朱雀大路西側溝と二条大路北側溝の交点の調査（平城宮跡第143次）を行った。

以上の調査によって、朱雀大路の南端（羅城門周辺）と北端（朱雀門脇）および、その中間地点の大路の形状が明らかにされた。

今回の調査は、奈良市としては昭和49年度の調査に続く、朱雀大路復原整備のための第2回目の調査に当り、同大路の保存整備を具体的に立案する資料を得るために実施した。

調査地区概要 発掘調査地は、奈良市二条町南3丁目1-1番地 福丸雄三氏所有地と、同193-1番地 石田 瀨氏所有地である。同地は南北に細長い水田耕作地二筆が東西に並び、南は現二条通りに接し、東、西には建物が建ち、二条通沿いにあるは、残り少ない水田耕作地の一画となっている。

両水田の中央の畦畔は、朱雀大路の東を区画する遺存地割と推定される位置にあり、西半水田には大路路面と東側溝、東半区には左京三条一坊二坪の敷地西南隅にかかる遺構が予想された。したがって、朱雀門心から南約260mの位置に、東西いっぱい幅5m、長さ25mの東西トレンチを設定し、中央畦畔を残して約120㎡の発掘調査を行った。

発掘調査は、奈良市教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、調査期間は昭和57年11月8日から同16日までの9日間である。

II 遺 構

発掘区は、水田耕作地で、土層は上から耕作土（約20cm厚）、床土（黄褐色粘質土、5～10cm厚）、遺物包含層（暗灰褐色粘質土層）が堆積し、遺物包含層下に遺構を検出した。

検出した遺構は、朱雀大路路面と同東側溝、左京三条一坊の坊垣築地基底部と、同坊二坪内の大土壇である。また、発掘区の東半部には中世にかかると思われる細い溝状遺構を数条と小土壇を検出したが、東端部の中世溝は奈良時代土壇と重複しているために、遺物を選別後削平した。

朱雀大路路面 発掘区西端部に約7m幅の大路東端部路面と東側溝の一部を検出した。溝肩から路面まで約2m程は、緩やかな傾斜をもつ。路面部には、暗灰粘土層の地山上に約10cm厚の灰黄粘土を敷き、さらにその上に灰色砂層が約15～20cm厚に堆積している。この砂

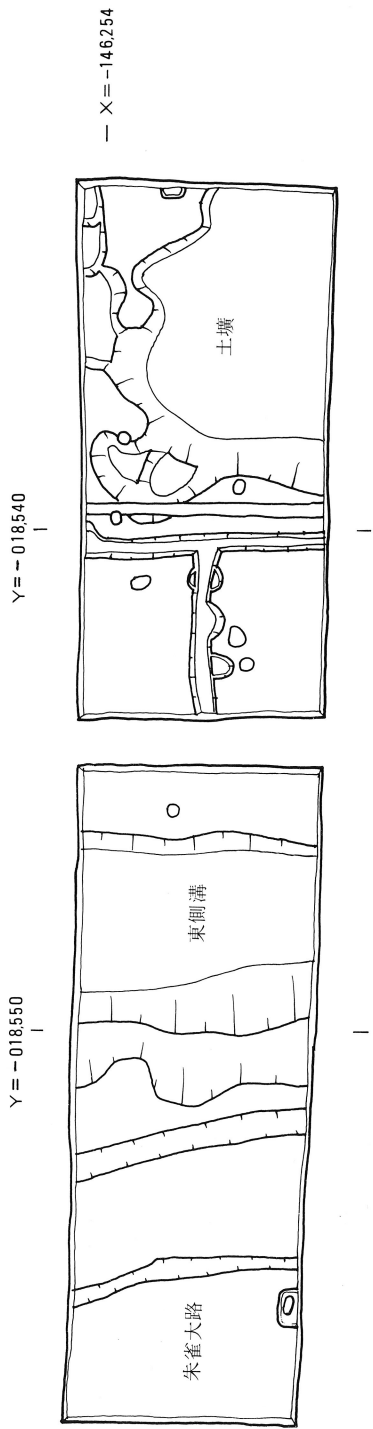


fig. 4 遺構平面図 (1/150)

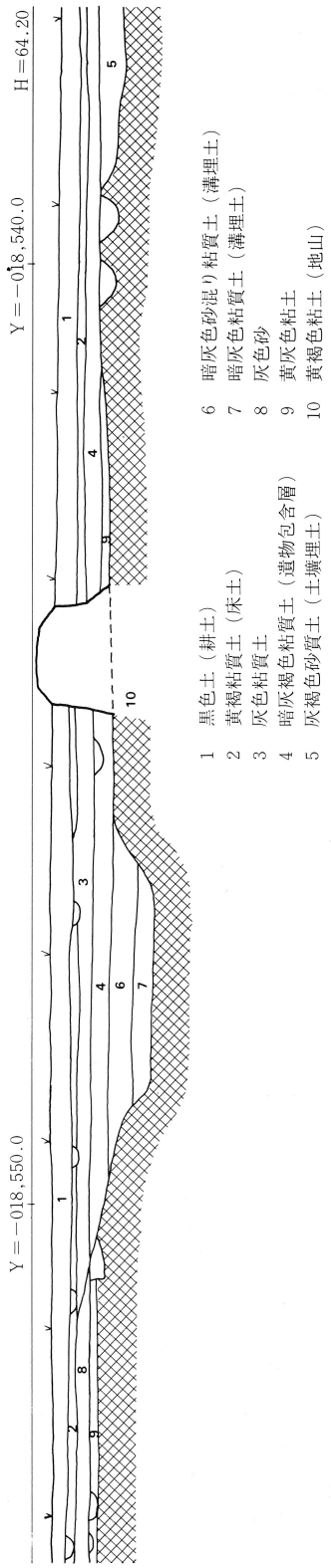


fig. 5 発掘区土層断面図

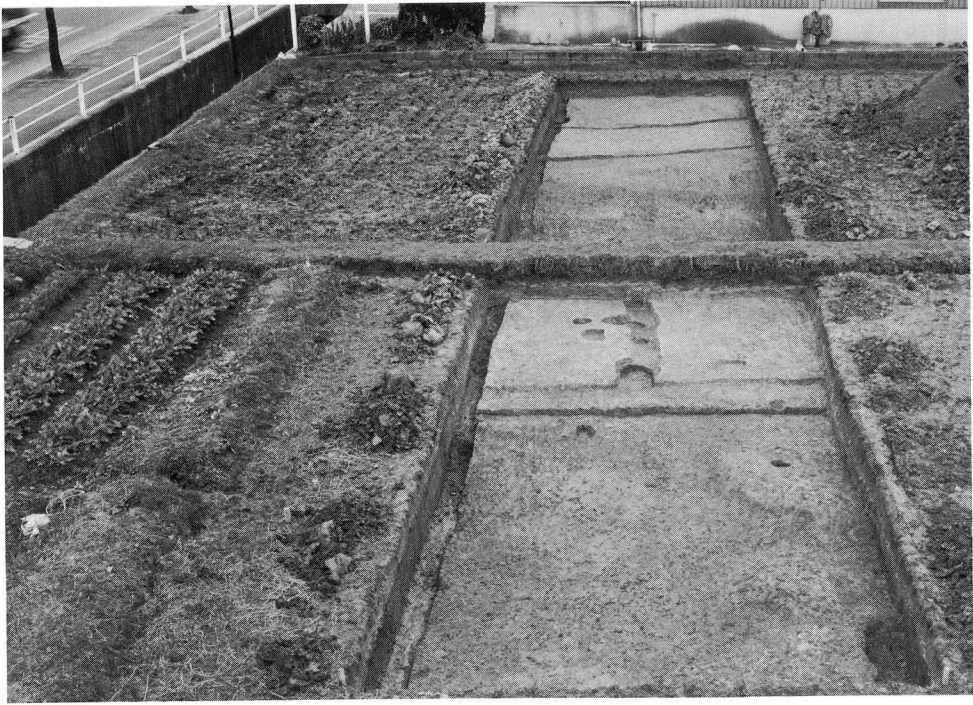


fig. 6 発掘区全景（東から）

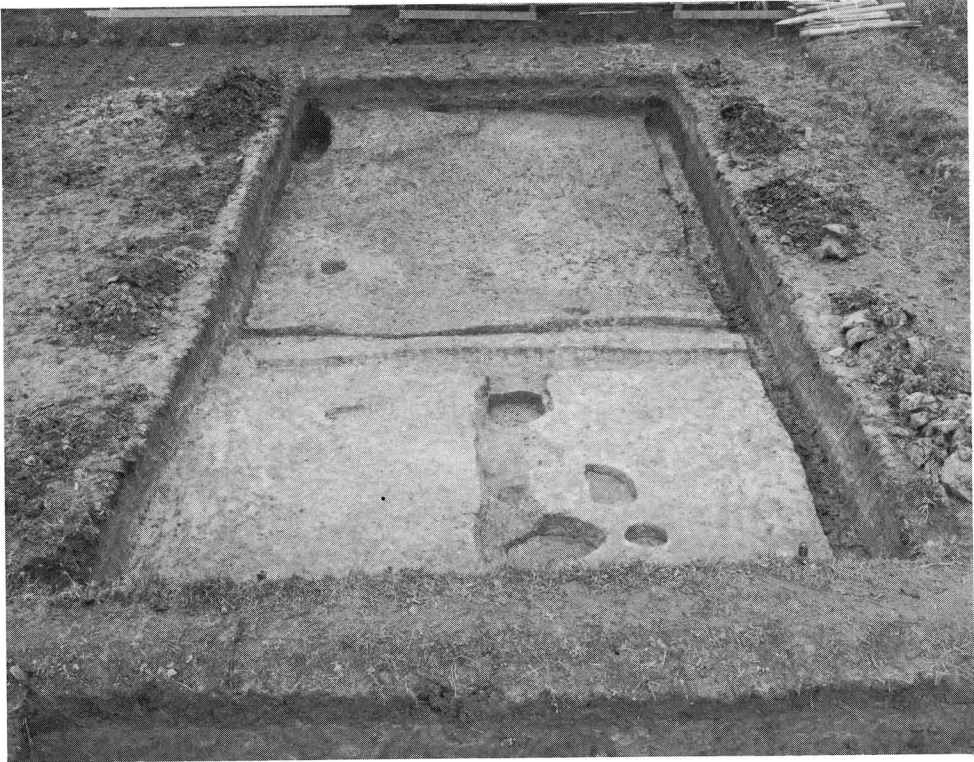


fig. 7 東トレンチ（西から）



fig.8 西トレンチ（東から）



fig.9 朱雀大路東側溝（北から）

層上には遺物包含層が無く、直接水田床土が重なるが、土層の堆積状況からみて、この砂層は大路路面に敷いていたものと考えられる。

路面上の遺構としては、側溝寄りに約2.5m間隔に2条の平行する斜行溝と、斜行溝の西に近接してトレンチ南壁に掘立柱の掘形と柱抜取穴を検出した。いずれも砂層下の灰黄粘土層上面を切込み、斜行溝内埋土は上層の灰色砂と同じである。斜行溝は溝肩が垂直に切込まれている個所が多く、車の輾痕跡とも考えられる。

掘立柱の掘形、抜取穴ともに砂の混入はなく、したがって、掘立柱は路面上に砂を敷く前の路上施設の一部かと考えられ、輾痕跡は砂を敷いた後の痕跡であろう。

朱雀大路東側溝 溝幅約3.6m、深さ約0.4mの素掘り溝で、底面は平たく、側壁の勾配も緩やかである。大路路面と側溝東側の築地基底部では高さを異にして、路面の方が約40cm程高い。この高低差は、路面から溝肩にかけての緩かな傾斜で処理している。

溝埋土は上・下層に分れるが、ともに自然堆積土ではなく、同時に埋立てられた土層と考えられる。遺物も少なく、流れた跡を留めないで、廃絶時に溝の底さらえを行ったのちに埋立てたものと思われる。

築垣 朱雀大路東側溝の東岸から水田の中央畦畔を含む6～7mの間は、遺物の出土量が少なく、畦畔の東2m幅には大路路面上と同じ黄灰粘土層を地山上に薄く敷いている状況である。黄灰粘土層は畦畔の西側にはなく、畦畔内で途切れている。畦畔内いっばいに黄灰粘土層が及んでいるとみてもその幅は3.6mであり、大路側溝と坪内土塋間のちょうど中央に位置することから、黄灰粘土層は築垣積土の第一層または、基礎の掘込地業に相当する土層とするのが妥当である。したがって、畦畔はやや西に寄っているが、坊垣築地の遺存したものとする事ができる。

土塋 発掘区の東端の坊垣築地内部は全面に土塋が広がっている。土塋の深さは20～30cm程で浅いが、大小様々な大きさのものが重複を繰り返して、発掘区内全面に広がった状況を示す。土塋内からは土器片が多量に出土して、その時期は奈良時代全般にわたっている。発掘区の位置が左京三条一坊二坪内の西南隅に位置していることを考え合わせると、これらの土塋群は、坪内の厨に近いごみすて場とみることができる。

Ⅲ 遺物

1. 土器

土器は朱雀大路東側溝、土塋、包含層、包含層上面の溝などから出土した。

朱雀大路東側溝出土土器 (fig. 10-2～4・7・8) 土師器と須恵器がある。

土師器：皿A 1点と杯または皿類と思われる小片 1点がある。

須恵器：杯B 2点、杯蓋 3点、皿A 1点、壺E 1点、壺K 1点がある。